

安全安心運行を旗印に

山交バス(株)代表取締役社長
伊藤 一郎氏



今月3日、いよいよ東西コミュニティバス(ベニちゃんバス)がスタートします。東部循環線と西部循環線がそれぞれのエリアを回り、これまでの100円循環バスに代わって中心市街地に乗り入れます。JR山形駅東口を起点に始

発は午前7時台、最終は午後6時台。1日計48便が元旦を除く364日休まず定時運行します。

「公共交通の充実には市民生活に欠かせない。多くの市民、通勤通学者、観光客にも大いに利用してもらいたい」、「東西から人が動くことよって中心市街地活性化に弾みがつく」—山形市、山形商工会議所、当社の基本協定調印に際して佐藤孝弘市長、清野伸昭会頭が新たな公共交通事業の意義を強調しました。私どももその一翼を担いたいと思っていますし、高齢者や障がいを持つ方、妊婦さんや子どもたちも安心して利用できるよう万全の体制で運行します。

業界は今、全力を挙げて安全安心運行体制の確立と遵守に取り組んでいます。昨年12月に道路運

送法が改正されました。安全規定に違反した貸切バス業者への罰金を大幅に引き上げ、悪質な場合は国の事業許可が取り消されます。事業免許は5年ごとの更新制となりました。業者を巡回指導する民間機関も設立され、49項目にわたって営業所ごとに厳しくチェックされます。

改正の契機となったのは2016(平成28)年1月、大学生ら15人が死亡、26人が重軽傷を負った長野県軽井沢町で発生したスキーツアーバス転落事故です。2000年の規制緩和後に事業者数と車両数が大幅に増加したものの、需要が限定的であったことから過当競争を招き、安全性の確保に問題が生じていました。軽井沢の事故はその最悪のケースです。大型バスの運転に不慣れな運転手に適切な指導をせずに乗務させるなど、会社側の教育・管理体制の甘さが事故を招いたとして運行会社社長と運行管理者が書類送検されました。安全運行は私どもの最重要課題です。

NHK連続テレビ小説「ひよっこ」に、昭和60年まで新庄一肘折間を往復していたボンネットバスが登場しました。赤とピンク色のツートンカラーに白色の横線。赤はりんご、ピンクはさくらんぼ、白は雪を表現しています。テレビを見た県内をはじめ、県出身者から、「山交バスではないですか？山交バスに間違いないですよ。懐かしい」という声が多数寄せられました。今は茨城県内のNPO法人が所有しイベントに使用していますが、うれしい限りですし、「バスは地域のシンボル」ということをあらためて実感しました。

現在、当社は路線と貸切合わせて約250台のバスを保有、乗務員体制を整えて経験豊かな運行管理者のもと運行しています。今年4月には山形駅—仙台空港直通高速バスを復活させました。「地域の日常の足」から「旅行・インバウンド」まで「安全安心・快適さ」を旗印に、社員と一体となって地域の発展に貢献していく決意です。

(山形商工会議所評議員)



今月の表紙 「男山酒造(株)」(八日町)

ふるさと画家・上野啓太氏作。「わが町」をテーマに、イラストでまちおこし運動を行っている「やまがたマーチング委員会」(事務局・株大風印刷)提供。